

講 演

第十九卷第五號 昭和八年五月

最近の滿洲事情に就て

(昭和八年三月三十日土木學會第六十回講演會に於て)

陸軍輜重兵中佐 柴山兼四郎

On the Recent Conditions in Manchuria

By Kaneshiro Shibayama, Lieut. Col.

内 容 梗 概

本講演は目下時局の中心を成して居る滿洲の事情特に熱河及北支那の情況並に軍事行動に就て述べたものである。

最近の滿洲の事情に就て話をされる様にといふことでありますが、滿洲の事情よりは現在時局の中心を成して居る熱河若くは北支那の事情の方が御参考になりはしないかと考へますので、其方をお話いたしまして、滿洲の事情に就ては、御質問に應じて申上げることにはいたしたいと思ふのであります。

熱河は滿洲國の一部を成して居るのでありますが、熱河經略後、熱河の行政區域が變りまして、北1/3即ちシレムリン河の流域以北を興安西分省といふことにいたしまして、今日熱河省と稱する地域は、シレムリン河以南、萬里の長城に至る間の地域といふことになつて居るのであります。

熱河の地勢は大體二つに分れます。シレムリン河の流域は非常に廣い平原で、陰山山脈の流れが東の方に走つて居る。此一帯の地帯は山地帯で、即ち北半分が平地、南半分が山地なのであります。丁度南1/3の所に東西に山脈が走つて分水嶺を成して居る。長城の線に近い所に分水嶺があるのであります。其以北は全部シレムリン河、所謂遼河の上流に注いで居り、それ以南は瀋河に注いで居るのであります。かういふ關係になつて居るのでありますから、熱河の大部分は地理的に見て當然滿洲地方に歸屬すべき性質のものであると考へられるのであります。

此地方に於ける産業上の價值は、只今申上げました様な地形でありますから、農産物としては大なる産額はありません。辛うじて400~500萬の省内の人民の需要を充たして居るといふ程度で、輸出せられるものは多少はありますが僅かであります。牧畜は發達して居りますが、それもシレムリン河一帯の草原地帯で、他の山地帯には牧畜は殆ど行はれて居りません。

其他の産業、即ち鑛業、林業なども發達して居りません。極めて幼稚なものであります。奉天省に接する地方から石炭が出る以外には、現在鑛産品は何等見受けません。林業に至りましては殆ど産業として見るべき森林はない、殆ど禿山であります。

熱河の産業上の價值は現在まで調査し得た結果に依りますと大なる價值は認められないのであります。將來各種の方面に學術的調査が爲し遂げられて無限の寶庫が發見されるれば兎も角、現在の所では大した産業上の價值は認められないのであります。従來此方面には學術的研究をする様な機會が與へられず、又調査に入り込まうとしても危険で入れないといふ關係から、全然未踏査の所が多いのであります。従つて將來踏査するに従つて、意

外の發見がないとも言へないと思ひます。噂に依ると、金鑛が相當にある、石油の脈もある、豊寧縣、凌源縣には石油の噴出する徴候があると言はれて居りますけれども、専門家が行つて確實に調査したのではありませんから、其眞否は判断し得ないのであります。

たゞ熱河で特産品として取扱はれて居るものは阿片でありまして、到る所に栽培されて、各方面に輸出されて居ります。其の外に藥草が相當に出て居ります。就中甘草は非常に産出が多く、日本又はアメリカあたりにも、從來から大分輸出されて居ります。

交通状態は非常に不完全であります。奉天省位の面積を持つて居りますけれども、交通線としては殆ど見るべきものはない、たゞ北票から錦州に至る運炭鐵道が奉天省境まで敷かれて居るだけで、それ以外には何等交通機關の設備を持たない。従つて熱河省内に於ける交通網は、原始的の儘に残つて居る。たゞ北京から承德に至る道路は北京の方から改修をして從來からバスが通つて居りますが、滿洲方面に對しては、さういふ交通網は從來まではなかつたのであります。將來はどうしても錦州方面或は錦州の南の連山附近から熱河省に至る鐵道が敷設されるであります。又開魯方面から林西若くは赤峰方面にも鐵道が敷設されることと信じて居りますが、現在の所では極めて原始的な交通網しかありません。従つて最近行はれました熱河作戰。殊に行軍には相當に苦心された様であります。若し熱河經略が今日まで續いたならば、假令全然敵が居らなくても斯様に迅速に作戰は出来なかつたらうと想像して居りますが、幸に解氷期前に作戰行動が一段落を告げたので斯様な迅速な行動が許されたのであります。現在では作戰行動よりも補給の困難のために苦心をして居ります。朝陽から承德までが日本の里數にして70里、開魯方面から約120~130里、最も近い緩中方面から横に承德に進んで行くとしても40~50里ある。

所が渤海の沿岸から承德へ行く所の東西に通ずる道路は非常に悪くて、殆ど軍隊の交通を許さぬ状態であります。どうしても朝陽方面から行くか、赤峰方面から後方の聯絡線を通らなければ、現在では補給が出来ないといふ状態に置かれて居る。其間を粗悪なる支那馬車なり、貨物自動車なりで、今日補給を續けて居るのであります、之には相當苦心をして居る様であります。

次に熱河經略の經緯即ち日本側から、又支那側から眺めた熱河經略の跡を回顧して見たいと思ひます。此間には色々の經緯がありました。殊に支那側に於て、日本側の熱河經略を如何様に取り扱つて居るかといふことに就ては、將來の時局を見る上に參考になる點が多からうと思ふのであります。

第一に日本側から見た熱河經略、之に就ては昨年の暮あたりから色々の議論がありました。熱河經略をやらなくても滿洲國さへ健全に發育すれば、自然的に熱河經略が行はれることになるのではないか、即ち湯玉麟は滿洲國に歸順をして一兵も用ひずに完全に熱河が滿洲國の一地方になり得るのではないか、それよりも滿洲國の建設に努力した方がよいといふ議論もあつた。又一部に於ては熱河攻略はやらねばなるまい、併しそれには時期がある、もつと時期を延ばしたらどうか、其當時は國際聯盟が悪化して居つたのでさういふ時期に熱河攻略をやるといふことは更に之に油を注ぐ様なものである、大局から見て利益ではないから延ばしたらどうかといふ議論もあつた。

尙それとは反對に熱河攻略を何故やらないか、早くやつたらよからう、早くやらないから滿洲建國の施設が順調に行かないのだ、軍部は熱河經略といふ掛巻ばかりで一向やらんではないか、早くやれといふ議論もあつた様であります。當時私共は之等の議論は何れも相當の理由根底を持つ議論であると考へたのであります、軍部としては之等の議論を研究審査の結果、熱河經略は或る時期には自主的に斷行しなければならぬ、自主的と言つても内外の情勢を顧慮することなしに無謀にやれといふのではないが、若しも國際關係が之を許すならば成るべく早くやるといふ方針を定めて居つたのであります。

其理由は茲で私の申上げるまでもないことと思ひますが、話の順序として一應申上げて置きたいと思ひます。第一に、滿洲國家が順調に發育すれば抛つて置いても熱河は當然歸屬して來るといふことは一應尤もであります。其發育に重大なる關係を持ち、常に其發育を妨害するものが傍にある、即ち滿洲國の内部に毒素を撒き散らす癌腫がある。それが體内の一部にあるといふことは、一方に發育を好くしやうとしても不可能である、其癌腫の根源を取除かなければならぬ、更に其癌腫の根源を成す北支那の張學良政權、之に對して何等かの方法を講じなければならぬ、癌と共に其根まで摘出するのでなければ滿洲建國は出來ない。

其根を摘出するためにはどういふ方法が良いか、北支那に向つて直接兵力を用ひることは最も手取早い方法である。併し一般の情勢がそれを許さないとすれば、別の手段で行かなければならぬ。それには熱河を經略すれば、自然的情勢として北支那に於ける張學良政權、所謂癌の根を成すものが解消する、言換へれば北支那に於ける學良政權の没落といふことを希望するならば、熱河經略をやるより外に方法はない。尙熱河に支那軍隊の侵入することを黙認して、長く之を放置するならば將來どうしても熱河經略をやらなければならぬといふ時期が來た時に、非常に多くの犠牲を抑はなければならぬ。熱河に侵入して居る支那軍隊を其儘に放任することは、熱河内部に於ける要點に防禦設備を構築することを許すといふことになつて、一日經過すれば一日だけ防禦設備は堅固になる。

而も支那の軍隊それ自體に於て防禦工事を施すだけならば、從來の經驗に徹してさまで驚くには當らないのでありますが、最近支那各地に於ける状態は支那軍隊内に於ける該般の指導が必ずしも支那人の手に依つて行はれるのではない。外國人の手に依つて指導され、實施される場合が少くない、現に上海事件の時には支那の飛行隊の中に若干のアメリカの飛行士が居つた。又十九路軍の陣地構築は、ドイツの將校が指導して居つたといふ事實がある。従つて熱河を長く放置すれば熱河に於ける軍事施設に對して相當に進歩した軍事的知識を持つ外國人が來て、之を指導しないといふことは斷言出來ない。さうなると非常に堅固なものが出來上つて之を攻略するために多大の犠牲を抑はなければならぬといふことも、當事者として考へなければならぬ。

斯様な理由で熱河經略は國際情勢が之を許すならば成べく早くやる必要があると考へまして、大體さういふ方針を立て、居りました矢先に、突發的事件として昨年暮と本年1月に山海關事件が起つた。其山海關事件は世界各國に非常な衝動を興へて、各國の政治家、外交家が色々の意味に於て之に評論を加へた。其結果を綜合すると、大體諸外國の肚が讀めたのです。北支那に出ることは日本としては餘程注意しなければならぬ、熱河は滿洲國の一部であつて、滿洲國が之を經略することは或る意味に於て黙認しなければならないだらう。大體各國ともさういふ意圖であるといふ情報が私共の方に入つて來たので、更に之を確めて見たところが、皆同様の情報を齎した。

そこで1月中旬にはもはや國際情勢は熱河經略をやつても心配はない。國際情勢が之を許すならば早い方がよい、けれども何分にも氣候の悪い所であるし道路も悪いし、相當に準備をして行かなければ、餘計な犠牲を出し困難な行動をしなければならぬ。愈々やると定まつたならば相當の準備をして、解氷期までにはどうしても之を完了しなければならぬ、先づ2月下旬から、3月中旬にかけて完了するといふ方針で斷行されたのであります。

當時の支那軍の配備、其他支那軍の組織、指揮系統、各種の方面から熱河内部の状態を調査して見ると大なる抵抗はなかりさうである。けれども2箇所では相當の抵抗を受けるかも知れない、1箇所は凌源附近の線、1箇所は承德附近である。此處では數日を費さなければならぬだらう、其他の地方は大した事はないと判斷して居つた。先づ上乘に行つて3週間、拙く行くと3週間は掛るかも知れぬ。朝陽から承德までは70里、1日10・里宛歩くにしても1週間、無人の境を行くとしても1週間は掛る。ところが弱いにしても途中支那軍を排撃しつゝ前進

しなければならぬとすれば、多少の時間は停らなければならぬ、前進出来ないといふ日もあるか知れぬ。さういふ事を考へると、70~80里の道を行くには10日以上を要する、先づ3週間で行けたら好い方であるといふ判断をした。従つて承德を占領するのは、先づ3月の10日頃であらう。陸軍記念日に承德に日章旗が翻るだらうといふ豫想をして居つた。

ところが3月の4日には承德城内に日章旗が翻つたのでありますから、私共豫想したよりも1週間早かつた。斯様に迅速に作戦行動の出来た原因は色々ありませう。第一に熱河作戦に従事した第一線は、指揮官以下が非常によく準備をした。第八師團の如きは、いつか熱河攻略をしなければならぬといふことを考へて居つたので、去年の夏頃から毎日一遍宛は高粱の粥を食べて居つた。そして如何なる所でも所在の物を食べて行くといふことに相當の苦心を拂つて準備をして居つた。それから熱河の地形、殊に交通網の關係に就ては其偵察が實に綿密を極めて居つた。斯様に準備をして丁度弾力性のある針金を縮めた様に、何時でも其手を放せば或る程度まで伸びて行くといふ弾力性を與へることに努力をした。さういふ關係が作戦行動の快速な一つの原因を成して居る譯ですが、更に熱河省民が湯王鱗の苛斂誅求に倦き倦きして居り、早く日滿軍の來ることを待つて居つた。即ち熱河省民が日本の軍隊に對して非常に好意を持つて居つた。これが渺からず作戦行動を快速ならしめた原因を成して居るのであります。

それは獨り宿營とか、給與とかいふことに便宜を得たばかりではない、作戦行動の上にも便宜を得た。それと餘計な煩累が何もなくあつた。例へば前面にある敵の退却が、我軍の飛行機で偵察するよりも早く日本軍に知れて來る。それは彼等土着民が事前に知らせてよこしたのです。「もう退却準備をした」、「もう退却した」といふ風に直に内通して來る。又彼等地方の自衛團、自警團が日本の後方連絡線の護衛をしてくれるといふ様な關係が、渺からず我が作戦行動を有利ならしめた。それから最近著しく進歩したところの航空機の利用及自動車の利用であります。或る時は飛行機で彈藥を運び、糧秣を選んで前線に補給をした。そして歸りには負傷者を乗せて後方の病院に運ぶといふ風に、今度の熱河作戦位飛行機が活躍した筋例はないのであります。

斯の如くあらゆる方面で便宜を得た爲に、斯様な快速な作戦行動が出来たのであります。更に支那の軍隊が日本軍に對して戦意がなかつたといふことも見逃してはならない。只今申上げましたのは日本側の作戦行動に關する事ではありますが、如何に日本側がうまく行つても敵が頑強に抵抗すれば仲々前進が出来ない。ところが豫想以外に早く退却をした。斯程までに早く退却をし様とは、實は私共も思つて居なかつた。一部が潰亂状態に陥つたならば、全線が潰亂するといふことは私共も豫想して居つたのであります。其豫想の如く前線一部の潰亂の爲に全線潰亂をして、何等抵抗らしい抵抗をすることなしに長城の線に退却してしまつた。あれ程宣傳して置きながら支那軍が何故日本軍に抵抗をしなかつたかといふことは、彼等の内部に色々事情があるのでありまして、それが事態を斯様に導いたのであります。これは後に詳しくお話申上げることになります。

尙熱河經略に就て私共が成べく早くやる必要があると考へた理由の中には、斯ういふ事もあつたのであります。それは何時までも熱河をあつて放任して置くといふことは、日支の關係を何時までも今日の様な尖鋭化した状態に置くといふことであつて、日支の關係から見て面白くない；若しも熱河經略が終つて定まるべきものが定つたならば、これを契機として日支國交の調整といふことが出来るのではないかといふことが熱河經略をやらうといふ一つの理由になつて居つた譯であります。

次に支那側から見て熱河經略をお話申上げます。支那側では熱河問題をどういふ風に考へ、又どういふ風に取扱つたかといふと、支那側は支那側で熱河問題を國策を有利に展開すべく取扱つた。昨年中は色々な風説がありま

したが、熱河内部には張學良は一兵も入れて居らなかつた。ところが本年初めになつて急に學良の軍を熱河内部に入れ出した。そこで我が當局は學良に對して非公式に熱河に兵を入れることは止める、滿洲國に正規兵を入れることは徒に事端を紛糾せしめ戰を挑むものだから止める、若し此忠告を聞かずに兵を入れるならば、己むを得ず之を擊攘しなければならぬ、之を擊攘する爲に起つた全事態は盡くお前の方の責任であるぞといふことを通告したのであります。ところが張學良の答は自分は熱河に1人も兵を入れたくない、其證據には今まで1兵も入れなかつたぢやないか、若しも入れる必要があり、熱河を回收し様とするならば、もつと有力な兵力を以て熱河に侵入して居る筈である。今日まで熱河に兵を入れなかつたといふ理由は自分が熱河に對して事端を滋からしめることを好まないからである、併し今度入れたのは自分の意志ではない、南京政府の蔣介石の意志である、三中全會で抗日政策を議決した。其第一項に熱河回收といふことがある、それが爲に東北軍を4個旅團熱河に入れて、其責任を學良に負はせるといふ命令が來たので直に入れたのだ、併し今日本からさう言はれても、何等日本軍の抵抗も受けず何も事件が起らないのに入れた軍隊を其儘引戻すわけには行かない、又自分が兵を入れても熱河が確實に其兵力で保持出來様とは夢にも考へて居らぬ、2~3萬位の兵を入れても、前面に居る日本の第八師團の兵力を以てしたならば、瞬く間に總崩れになることはよく承知し居るけれども、命令だから己むを得ない、避ける譯に行かぬ、強いて日本で長く兵を入れて置いてはならないならば攻撃してくれ、さうすれば何時でも自分の方は引下るからといふことを申して居るのであります、これは恐らく學良の本音であらうと思ひます。

これは學良ばかりでなく多少でも日本といふものを諒解して居る支那人ならば、日本軍と戰をして勝つてやらうといふ様なことを考へて居る者は恐らくなからう。日本の國民が三歳の兒童に至るまで、支那軍に負けないといふ深い信念を有つて居ると同様に、支那人は日本軍には勝てないといふ深い信念を有つて居るのぢやないかと思ふ。それならなぜ斯様に勝てないといふ信念を有つて居る所に戰をすべき軍隊を進めたかといふと、それは對外的ではなくて全く對內的である。

然らば當の責任者である學良には到底保持することが出來ないといふことを考へて居る蔣介石が、何故兵を入れさせたかといふと、それは蔣介石の計畫的の政策であります。蔣介石としては國際聯盟が大體峠が見えた、如何に國際聯盟に頼つて見た所で、國際聯盟の現在の力では如何とも仕方がない、けれどももう一步悪化した事態が日支間に起るならば、國際聯盟も今度こそは勘忍袋の緒を切つて、徹底的な力を以てする制裁を日本に加へるかも知れぬ、何とかして百尺竿頭一步を進めたいものであると考へた。併し其種は何もない、只残されたものは熱河問題である。併し日本は熱河經略をやると言つて居るから、熱河問題に引懸りをつけて熱河問題で何等かの引懸りが出來たら、支那に有利に展開してやらうと考へたらしいのであります。

そこで先づ學良に熱河に兵隊を入れさせる。出来るだけ長く熱河で抵抗させる。さうして愈々是は本當の戰爭状態である、日本と支那の正規軍を以てする大規模の戰爭状態であるといふことを宣傳し、日本の侵略を宣傳し、日本を壓迫し様と考へた。それには學良軍を入れるに如くはないと考へて、學良に斯様な行動に出でしめた。

併しそれは希望通りに行かぬかも知れぬ、假りに希望通りに行かないで現實に現はれた様に、他愛もなく熱河を引下つて、國際關係を利用し得なかつたとしてもそれが爲に學良は責任を負つて止めなければならぬ運命になる。北支那は學良のものでなくなる、學良のものでなくなるならば、自分がそれを受取らう、蔣介石としては學良を下野させるといふことを強いて希望はしないが、兎に角日本國民の全部の目の仇にして居るのは學良であるから、學良を除くことに依つて日本の氣分も一轉するだらう、對日策策が好くなるだらう。

學良をやめさせることが出来るならば、やめさせて其後を自分が受取らう、それには熱河政策を利用することが

よい、學良に責任を負はしてやめさせて其後は自分が受取らう、其受取る時に學良の軍隊が澤山居つては具合が悪い、學良がやめる時には兵が少なくなつた方がよい、それにはなるべく多くの兵を熱河に入れさせて、日本軍と戦はせて損害を受けさせる、若し全滅をさせることが出来るならば尚ほ結構である。それで蔣介石の考では熱河經略は一石三鳥で、上乘に行けば國際聯盟をうまく利用し得る、それが出来れば學良下野で北支那は自分のものになる、同時に學良の軍隊は解散費も出さずに日本軍が立派に處分して呉れる。

尙蔣介石として考へなければならぬことは、學良は下野するであらう、併し下手にまごつくと其の儘自分の手に北支那がころがつて來ないかも知れない。横の方にいや俺が受取るのだと云つて飛出す奴があるかも知れない、所謂油揚を鷲にさらはれると云ふことになるかも知れない、それを豫防してかゝらなければならぬ。そこで熱河經略が始まる前に、彼蔣介石は先手を打つたのであります。

そこで將來學良が下野をした場合に、先づ第一に受取りに來るだらうと思はれる様な北支那に於ける要人を、全部南京に連れて來て監禁をする、之が一番宜しい受取人を無くして置く方がよい、さうすれば自分の所どころがつて入ることは當然であると考えた。北支那に於ける要人といへば段祺瑞、吳佩孚、閻錫山、馮玉祥といふ連中である。そこで是等の連中に案内状を出した。なにがしの黄白をつけて案内状を出した。さうして是非御高見を拜聴したい、國家非常の場合、何とかして國難を打開しなければならぬ、あなた方は北支那に蟄居して居る時ではない、宜しく南京に來て、此國難を救ふべき國策樹立の援助をなすべき時期であるから教を乞ひたい、是非來て呉れと言ふので諸長老に對して使を出した。けれども蔣介石の肚の中では、之を全部呼寄せざる譯には行かないだらうけれども、其中で最も重要な人物である段祺瑞だけはどうしても連れて來る必要があるといふので、段祺瑞の所には一番信用のある人が使に行つた、又其使の持つて行つた包みの中には一番重い黄白が包まれて居つた。段祺瑞周囲の要人は黄白に目かくれて段祺瑞の南京入を勧めた。そこで段祺瑞も、是は我輩の政見を聽いて建直しをやるのかも知れない、實際今日は國難である、何とか打開の策を教へてやらうと云ふ自惚れも手傳つて、まんまと蔣介石の手に引懸つてしまつた。所が行つて見ると御高見拜聴とは案内状に書いただけの話で、實際は御高見等は聽く必要がないのであるから、先づ御老體よく來て呉れたと云ふので、あつちこつちの御馳走に引張り廻して、御高見を承る暇もない間に彼は或邸宅を興へられてそこに監禁された、さうして今日依然として監禁されて居るのであります。

それで蔣介石は先づ北支那に於ける受取人は無くなつた、馮玉祥にも是非來て呉れと言つたけれども、馮玉祥は頭として行かない、馮玉祥は監禁された段祺瑞よりは餘程人が悪い。閻錫山も矢張り頭張つて行かない。吳佩孚も行かない。結局段祺瑞だけが行つた。蔣介石も來なくても宜い、此連中には受取る資格がないと思つたから、餘りモーションはかけなかつた。

學良はといふと學良は成べくならば熱河經略が終つても北支那は持つて居たい、けれども下手をまごつくと熱河經略の責任を以て自分は下野しなければならぬ、併し下野したくない、だから責任は負ひたくない。そこで學良は熱河經略が始まると、所謂熱河に兵を進める前に蔣介石に出て來て呉れ、熱河を保持することは重大な事である。私だけではいかぬから出て來て貰ひたい、お助けを願ひたいと言つたけれども、蔣介石は共匪征伐で忙しいから到底いけない、代表者をやるからといふので楊杰をやつた。楊杰は現在の支那の軍人社會では第一の戦術家であると言はれる人であり、之を蔣介石は學良の方へやつた。學良は是で安心だ、蔣介石が斯ういふ立派な人をよこして呉れば、此人に責任を負はせることが出来る、それがためには表向きの要職を興へなければならぬといふので、參謀長になつて呉れといふことを申込んだ。蔣介石にも楊杰を參謀長にするから辭命を出し

て呉れと中込んだけれども、蔣介石はそれをはねつけた。

楊杰はそんな重大事件は私共の如き不肖の者にやれるものではない、是はあんたでなければ出来ないと言つた。又蔣介石は學良に向つて、あなたの部下には立派な秀才が揃つて居る、私のやつた楊杰などは用ひなくても立派に出来るだらうから、楊杰は横から手傳をする位にして呉れと言つて斷つた。それで楊杰は到頭參謀長にはならなかつた。參謀長にならないといふのは責任は負はないといふことである。折角工夫して責任の半分を南京政府に負はせ様とした學良の計畫は見事に失敗した。併し責任はよし自分に來ても動かない。それがために先づ第一に内部的に結束を固める必要がある。内部から足元から鳥が起つ様な事で自分が覆へることのない様にする必要がある。それが爲には北支那に於ける中心人物と目される元老を北支那から追出さなければならぬ。どんなに自分に不平を持つて居る軍閥が居つても中心がなければ大丈夫だ、中心になる奴を北支那に置くとうるさい、之を先づ南京にでも追ひやる。さうして南京に監禁でもして置いて貰へば、自分の足元を狙ふ奴はないと考へたので、蔣介石に何かうまい工夫はないかと相談を持ちかけた。

所が蔣介石はそれは渡りに舟と考へた。何とかして自分の手にころげ込む様に北支那の長老を連れて來やうと考へて居る時に、學良の方から北支那の長老を南京に連れて行つて呉れぬかといふ話であつたので、宜しい、お前の願なら何でも達してやるといふので先程申上げた様な手段を執つたのであります。之に關する彼等兩者の往復に就ての面白い消息も私共の手許に入つて居ります。斯様に段祺瑞の南京行は、彼等の間の仕組みで出來たのでその異に掛つたのが段祺瑞であります。學良も段祺瑞の南下に就ては喜んだ別の意味に於て蔣介石も喜んだ。

蔣介石は更にもう一つ考へた。北支那に學良が居なくなるといふことは、先づ十中八九は確實と見て差支へない。學良の居なくなつた後が自分の手に入るといふことも大體確實であらうが、併し日本の態度如何に依つては或は北支那に一混亂を免れないか知れぬ。何故かといふと若しも日本の意圖が蔣介石の北上を拒むといふ様な態度に出るならば、之に勢ひついて舊東北軍、學良の軍隊、若くは雜軍は自分に反抗するかも知れぬ、さうすると事面倒だ。だから日本に對して手を打つて置く必要がある。それはどういふ手かといふと、日本の氣に入りさうな者を北支那に持つて行くといふことを以て手を打たなければならぬ、さうすれば日本人は必ずそれに引掛つて、さすがに蔣介石はえらい、是で日支關係が圓滿に行くといふことで決して悪い感じは持たない、此手を打たなければならぬと考へて、日本の熱河經略に對する對應策を蔣介石は執つたのであります。

さういふ次第で、計畫通りに北支那の時局は進みつゝある。熱河作戰が終つて、學良が熱河に侵入せしめた軍隊は悉く關内に雪崩を打つて退却した、それと同時に蔣介石は自分の部下の三個師團を北京の北方に入れて、自分は保定に來て、保定に學良を呼んで、下野しろと言つて因果を含めて下野せしめた。北支那は我輩が接收をすると言つた。多少この際に舊東北軍所謂學良の舊部下或は雜軍が色めき渡つたのでありますが、何分にも迅速なる兵力の移動に依つて、中央軍が意想外に早く北支那に入つたので尙ほ其當時蔣介石は、十個師團は北支那に送るといふことを宣傳して居つたので、それでは敵はぬといふので、泣寢入になつた。それと同時に蔣介石は若しも日本が之に對して苦情を言ふと雜軍が勢を得るかも知れぬから、日本の感情を和ずる必要上、何應欽を北支那によこす、又黃孚を北平の市長にするといふことを宣傳した。黃孚を北平の市長に持つて來るといふことは宣傳だけで、彼が泥鰌者に語つた所に依ると、それはたゞ日本の新聞で知つただけで蔣介石からは何とも言つて來ないといふことであつた。是はまさに蔣介石の手であります。蔣介石が眞實に黃孚を市長とする意圖のなかつたことは明かなのであります。

更に蔣介石は日本と握手をした。そして熱河經略を契機として日支國交の回復を圖るのだ、直接交渉を始めるの

だといふことを言ひ出したので、舊東北軍、雜軍は蒋介石が相當の兵力を持つて北支那に居る。さうして日本と蒋介石とか手を握つて、若し日本の北支那に於ける兵隊が蒋介石の後押しをすることになれば、我々がいくらジタバタしても齒が立たない、早く蒋介石と手を握つた方がよい、そして將來の保障をして貰つた方がよいといふので、他愛もなく蒋介石に參つてしまつた。そして今日何等混亂の狀況もなく、着々と蒋介石は北支那接收の歩を進めて居る。此邊の蒋介石の手の打方は實に鮮かなものだと思つて居る次第であります。斯様な状態でありまして熱河經略を日支兩方面から見るとお互に色々の意味合に於て意味深長なものがあつたと考へて居るのであります。

而して熱河經略が實際齎した所の結果はどうであつたかといふと、日本の一部の者が心配した様に、國際關係は悪化しないばかりでなく、一部のアメリカの或る政治家の如きは熱河經略に依つて始めて支那の狀態が判つたと言つて居る。どういふ風に判つたかといふと、リットン報告書の誤りであつたといふことが判つたと言つて居る。成程支那といふ國は宣傳の上手な國で、口ばかりで國の實體は之に伴はない、而して軍閥といふものは國家國民の事は考へない。尙ほ茲に着目すべき事は、支那人は始終滿洲は支那のものであるから、どうしても取返さなければならぬ。又滿洲の 3000 萬民衆も支那のものであるといふことを深く考へて居る。決して滿洲國家の要人若くは滿洲國民は日本の言ふ様に喜んで居らぬといふことを宣傳して居る。所が熱河經略に依つて觀ると、それ程滿洲といふものに執着があつたならばあれ程早く逃げる筈はない、どう考へても判斷が出来ぬ、今まで宣傳した様に、滿洲に執着があるならば、一戦も交はずして退却するといふことは、どう考へても考へられぬ。又あれだけ迅速に作戰が出来たといふことは熱河地方民の意嚮といふことも考へられる、若しも熱河の住民が眞に滿洲國家或は日本に厚意を持たないならばあれ程迅速に作戰は出来ない、だから熱河の住民は恐らく滿洲國に厚意を持つて居る、而して支那の民衆はどうでも宜いといふ考へて居るのだらう、民衆だけではなく要路の人もさう考へて居るだらう。それでなければ何故あんなに早く敗れたか、あんなに早く敗れることはない筈だ、だから結局支那は日本人の言ふ様に駄目な國だ、國家も成さない、どうにも斯うにもならないのが支那だといふことが、熱河經略で始めて判つたと言つて居るといふ情報も、私共の所に到着して居ります。それと同じ様な種類の情報が、フランスからもドイツからもイギリスからも來て居ります。結局熱河經略は、國際場裡に日本から言へば好結果を與へて居ります。決して悪い結果は與へて居らぬ。之に反して支那側には言はせれば、支那側が之に依つて國際聯盟を好轉せしめ様とした熱河作戰が悉く失敗したといふ結果を齎したのであります。

尙ほ茲に重大な結果を支那側として齎したと思はれるのは、張學良の下野に伴ふ蒋介石の北支那接收であります。此北支那を蒋介石が接收したことに依つて、見様に依つては、將來支那内部が或は收拾すべからざる混亂状態を來すべき第一歩を踏出したとも言へる。何故かといふと蒋介石の實力は長江沿岸に於ける數省を治めるだけしかない、財政から觀ても、兵力から觀ても、北支那まで手を延ばしたといふことは長江沿岸に於ける蒋介石の勢力をそれだけ薄めたといふことになる。全般から言ふと到る所蒋介石の勢力は薄弱となつた。併し共匪は勿論のこと、其他の反蔣軍閥に、此機會に乗じ様といふ間隙を與へたことは事實である。尙北支那は現在ではどうにか斯うにか舊東北軍、雜軍が治まつて居るが、心から蒋介石の統率に服して居るのではなくして、表面上一時を糊塗して居る事象であると見られるのでありますから、將來何等か蒋介石に桶突く名義が立ち、又日本が蒋介石と握手をして居らぬといふことが彼等に分るならば、一騒動なしに北支那が治まるとは思つて居らぬ。若し一旦北支那に騒動が始まつて蒋介石が北支那から手を引かなければならぬといふことになれば、其機會に廣東方面は勿論のこと、長江沿岸に於ける共匪匪 其他所々に頭を擡げ掛つて居る反蔣勢力が一時に爆發的の峰起を見ないとも

限らないのでありますから、將來の支那の内部は更に多難多事を加へるものと判断して居るのであります。

それに對して我が日本はどういふ態度を以て進むべきかといふことを、私共今日兩國の關係から觀ますと日本は先づ當分靜觀をして行く。どんなに仲間喧嘩を仕様と、行詰らうと、排日が起らうと起るまいと、先づ暫く靜觀をして居る。而して眞に彼等が自覺し、日本と握手をして行かなければならぬといふことが解り、誠意を以て排日排貨を止めて、握手を求めて來るならば喜んで我れ亦之に應ずべきである。彼等が誠意を示すことなしに單に口頭禪を以て日支親善を策しても、それは徒に支那に乗ぜられるだけで何等の效もない、現に傳へらるゝ所に依れば、支那の對日政策は次の如きものが繰込まれて居るといふことであります。それは日本に對して硬軟兩様の政策を持つて居る、而して日本の對支外交方針を常にぐらつかして居る。

それから日本の一般民衆若くは軍部以外の勢力と日本の軍部とを離間せしめて國論の一致を妨害する、之を行はんが爲に、排日排貨は時に嚴に、時に緩に、或る時は好意を示し、或る時は猛烈なる排日をやる、さうすると日本の對支外交方針がぐらつくばかりでなく、實業家と軍部、軍部と政府の間の龜裂を生ずる、今日の如き日本の舉國一致といふことが段々崩れる、要するに日本の舉國一致を崩すといふことが對日政策の根本でなければならぬといふことを考へて居るといふ情報がある。此手は將來も始終打つだらう、現に先程申しました様に、何應欽、黃孚を持つて來て、いかにも親日政策をやりさうなことを言つて居る。尙ほ長江沿岸に行くと、今日排日ポスターはない、排日は止めたと思はれる。それで日本は強硬政策を執らぬ、靜觀しろ、手を出してはいかぬといふことになればそれは以ての外である、是は軍部が彈性力のない硬直した對支政策を持つて居るから斯うなるのだ、是は何とか言つて説きつけなければならぬといふことを考へる人がある。ところが豈計らんや、排日ポスター一枚もないが、日本の商店ならまだよいけれども日本の官公吏、日本の旅行者に對しても接近した者は遠慮なく首を斬るといふ。日本で首を斬るといふのは職を奪ふことですが、支那で首を斬るといふことになると首と胴體別々になる。さういふ深刻な排日が、現在漢口でも南京でも行はれて居る。さうかと思ふと之を止めて、時に日本の貨物を入れるといふ状態である。斯の如き軌道を走る政策は私共は永く續く筈はないと思ふ。これが5年も10年も續いたら、如何に支那の民衆が無智蒙昧であつても、目覺めない筈はない。民衆の目覺める時機が來て、人氣を失つたら國民黨の政策は行はれない時代が來る。現在でも國民黨の政策はいかぬといふことが、要人の口からも民衆の口からも洩れて居る、唯だこれが表面化して居ないだけである。さういふ軌道を走つて居る政策は永く續くものではない、何時か終熄をして、直に彼等が自覺をし、改変をする時機が來ると思ふ。

故に其過渡的時代にこちらから働きかけることは止めて、暫く見て居るのがよい、これ以上事態を悪化する様な事をすることは、支那に對してばかりでなく諸外國に對しても償しむべきである、殊更に感情を悪化して事態を紛糾せしめる様な事は絶対に償しむべきである。従つて北支那に對しては、北支那がどんなに混亂に陥つても兵を用ふることは絶対に償しむべきである、已むを得ない場合には如何に苦痛を忍んでも兵力を用ひなければならぬけれども、忍べるだけは忍ぶ必要がある。従つて萬里の長城線以外に兵力を用ひないといふことは、將來と雖も依然として續けらるべき方針でなければならぬと考へて居ります。之に關しては純作戰的の見地から見ますと隨分拘束した遣方で、關東軍の第一線部隊は非常に困つて居る様であります。斯様な戦争はない、何所から先へは行くなといふ様な戦争は恐らく未だ曾て世界の戰史上にないと思ふ。戦争といふものははづみである、所謂機動である。よく一般の人が、秋季に軍部でやる演習を機動演習といふ、はづみに動く演習は機動をやるのでなければ戦争は出來ない、其機動を全然封じられて、其線へ行つたら氣をつけて貰ひたい、それより外へ行つてはいかぬ、どんなに敵が來ても行つてはいけぬ、而して敵が入つて來るのは勝手次第、こちらから行つてはいかぬ。

斯ういふ戦争は無理な註文である。

敵の方は長城の線から出てはいかぬといふことはないから、成るべく長城の中に入つて攪亂し様とする、現在もやつて居る。熱河省に残つて居る數千の兵匪、北支那から入り込んだ兵匪がどんどん殖えて、日本の軍隊は其掃蕩に忙殺されて居る。毎日少なからざる犠牲を夫が爲に出して居るのであります。熱河を經略する第一段階の犠牲よりも、それ以後に出来た犠牲は何倍か知れぬ、恐らく10倍以上に達して居ると思ふ。それはこちらから出て行つてはならぬが、向ふは出放題といふ無理な状態を續けて居る結果である。獨石口から山海關までは120~130里ありますが、此間に萬里の長城の關門が47もある、其の47關門の中、日本軍が實際押へて居るのは5~6である、あとは皆開放した儘になつて居る。100里以上の線に互つて、四十幾つの關門を一々塞ぐには、到底僅かな兵力では出来ない、だから開けて置く外ない、又戰略的から言つても、多少は開けて置く方がよいので、開けて置かなければごみを掃出す口がない。

併し北支那から時々鼠の様なものが入つて來ることは認めなければならぬ。所がこつちから行つてはいかぬ、向ふから來ることは勝手といふのですから、第一線の將士の苦心は想像に難くない、作戰部隊は中央に對して、なぜ斯ういふ窮屈な眞似をさせるかといふ不平があると思つて居ります。だから直ぐ限の前にいたづらして居る鼠が後ろに廻つて何か嘯りさうな格好をして居る時には、たまには長城の線を越えて出て行つて、其鼠を追散らすなり、叩き壊すことも許されなければならぬと思ふ。此程度には一般も認めて宜しいと考へて居るのであります、成るべくならばやつて貰ひたくない。そこで一寸行つて叩いて引込む方は差支へないだらうといふ程度には認められて居るのであります。

所が新聞が色々書くものですから、滿洲國の軍隊が何所からか關内に侵入をしたとか、日本の何々部隊が關内へ出張つて、北支那へ兵を出すといふ様な事をお考になる様ですが、そんなことを神經過敏に考へなくても、政府が一旦聲明した、その聲明と云ふものは、僅かに1月か2月で變るものではない。現に熱河經略の始まる前に政府は何と聲明して居るか、關内には兵を用ひない特別の事情が起つた場合の外は、成べくならば關内には兵を用ひないといふことが政府の方針であつたのです。主義としては依然として今日關内に兵力は用ひない、併し只今申上げた様に、敵は始終妨害に來るのですから、之を追散らす爲に、一時關内に兵を動かすことがあるか知れぬ、それは認めて頂きたいと考へて居るのであります。

先づ大體熱河を中心として、更に北支那を結びつけた現在の事情は以上申上げた通りであります。現在は一時小康を保つて居りますが、將來全支那に於ける舞臺でどういふ芝居が演ぜられるか見物であると思つて居ります。其芝居が演ぜられた場合に、何等かの御参考になれば仕合せと存じて居る次第であります。これで私の講演を了ります。

眞田會長。私より御禮を申し上げます。柴山さんは支那に對する該博なる知識を持つて居られる方ではありますが本夕は職務御繁多の折柄にも拘らず吾々のために長時間に互つて吾々が現今最も知らんと欲して居る熱河問題並に北支の問題に就て詳しく而も解りよく御説明下さいまして吾々一同非常に有益なる知識を得ましたことを深く感謝いたします。尙ほいろいろ質問もあつたことと思ひますので、どうか食後に御述べて頂きたいと存じます。茲に一同に代りまして御禮を申し上げます。(拍手)